

## 小学校におけるいじめ (2)

酒 井 亮 爾\*

「いじめ」は、どの社会でもどの世代にも昔からみられたが、2006年には小・中学校でいじめを苦にした自殺が相次いで起こり、再度、いじめが社会問題としてセンセーショナルに取り上げられた(酒井, 2007)。ここでは、小学校の高学年(4年生～6年生)を対象にいじめに関する質問紙調査を実施した。質問紙の項目は、8項目からなっているが、ここでは、いじめの加害経験に関する項目について評定尺度で求めた結果について報告した。調査対象は愛知県内の3つの小学校の4、5、6年生児童303名(男子153名、女子150名)であった。その結果、いじめ経験は61.4%で、男子(73.2%)の方が女子(49.3%)よりも多かった。学年別では、4年生から6年生へとどの学年でも加害経験は60%程度であった。いじめ加害者の「いじめている」という認識といじめ被害者の「いじめを受けている」という意識には違いがみられた。いじめ加害の様態については、「悪口やいやなことをいわれた」がもっとも多く、次に「仲間はずれ」など、精神的な苦痛をとまなうものであり、さらに「たたく」や「持ち物をかくす」など直接的な行動となっていた。

いじめ加害者の気持ちとして、もっとも多い反応が「あとでいやな気分になった」や「かわいそうだと思った」であり、加害児童に良心やいじめた相手に対する後悔や罪の感情が起こっていることを示していた。

いじめた後に「気持ちがスカッとした」、「いい気味だと思った」という感情は、男子に多く、また高学年に高い比率でみられたし、「おもしろかった」というストレスの発散やフラストレーションの解消としてもいじめがなされていた。しかし、いじめを肯定する気持ちは低く、いじめてよかったと考える児童は少ないことがわかった。

いじめ行為の理由づけとしては、「前にいじめられたことがあり、その仕返しとしていじめた」という回答がもっとも多く、また、いじめ加害者は「いつか仕返しをされるのではないか」とこわがっていた。このことは、かなり多くのいじめ加害者が、以前はいじめの被害者であったことを示している。いじめ加害者のいじめたときの気持ちや理由づけからは、いじめ加害者もいじめながらも悩み苦しんでいることがわかる。親や教師がいじめ加害者の心の葛藤や悩み、フラストレーションなどを十分に聞いてやり、その心に寄り添いその辛さをわかってやることがいじめ防止につながるであろう。

キーワード：いじめ加害者、いじめの理由づけ、小学生、小学校

### I. 問 題

最近では青少年をとりまく環境は以前よりもさらに多様化しており、学校でも社会でもこれまでには見られなかった反社会的な現象や非行、命の軽視、ネット自殺、いじめを苦にした自殺などが増えている。「いじめ」は、どの社会でもどの世代にも昔からみられた

が、2006年には小・中学校でいじめを苦にした自殺が相次いで起きている。いじめがマスコミでセンセーショナルに取り扱われ、社会問題化したのはこれで3回目となる(酒井, 2007)。1985年と1994年にいじめが社会問題化したときも種々の対策が提案され実行されてきた結果、ある程度の効果をあげてはきたけれども、依然としていじめがあり、苦しんでいる児童生徒

\*愛知学院大学心身科学部心理学科  
(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: uga-rski@dpc.agu.ac.jp

が多くいたのである。

従来、いじめの定義については、いじめを「自分より弱いものに対して、一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実を（関係児童生徒、いじめの内容、等）を確認しているもの」（文科省初等中等教育局中学校課、1993）としていたが、文科省は、いじめの新しい定義（2007）として、「子どもが一定の人間関係のあるものから、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもので、いじめであるか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行い、従来のいじめの種類にパソコン・携帯電話での中傷、悪口を追加する。」とした。この定義を基にして、各学校から報告された結果によれば、2007年度の小・中・高・特殊教育諸学校の内いじめ認定件数は、124,898件ということであった。

その後、いじめをなくすために種々の対策がなされてきており、文科省が都道府県教委を通じてまとめた「問題行動調査」（文部科学省、2008年11月20日付けで発表）によれば、2007年度の「いじめ件数」は、約10万1千件で、過去最多の2006年度の約12万5,000件よりも約2割減となったという。校種別では、小学校が約4万9,900件（20%減）、中学校が約4万3,500件（約15%減）、高校が約8,400件（32%減）で小・中・高校ともに減少傾向であった。また、2006年度に初めて調査されたネット関連のいじめは、約5,900件で21%増加していた。

表1は、2007年度における東海3県の内いじめの認知件数を示したものである。全国的にはいじめ認知件数が約2割減少しているのに、東海3県の場合は増加している。全国的に比較すると、愛知県の内いじめ認知件数はもっとも多く、岐阜県も3番目に多い。このようにいじめ件数が増加を示した要因として、愛知、岐阜両県教委とも「小さいいじめも見逃さない」という方針で、児童・生徒への質問紙調査などを徹底してきた結果や岐阜県では2006年に中学2年生の女子生徒が部活動のいじめを苦に自殺したことが背景にあり、表面化しにくい「パソコンや携帯電話による中傷や嫌がらせ」などを掘り起こして調査したためであるとしている。

## II. 目 的

いじめには、「1. いじめられっ子 2. いじめっ子 3. 観衆（はやし立てる子） 4. 傍観者」という4

表1 いじめの認知件数（東海3県の場合、2007）

|     | 小学校   | 中学校   | 高 校 | 特殊支<br>援学校 | 計      |
|-----|-------|-------|-----|------------|--------|
| 愛知県 | 5,376 | 4,981 | 576 | 18         | 10,951 |
|     | -89   | 452   | 5   | 12         | 380    |
| 岐阜県 | 5,679 | 2,262 | 333 | 19         | 8,293  |
|     | 699   | -14   | 79  | -9         | 755    |
| 三重県 | 194   | 313   | 69  | 4          | 580    |
|     | -153  | -178  | -42 | 1          | -372   |

(注) 下段は前年度比較での増加数、マイナスは減少数。

層構造があるという。この研究では、小学生（4、5、6年生）を対象として、いじめを経験したことのある児童に対して、いじめをした後にどのような気持ちになったのか、なぜいじめたのか、その理由などについて質問紙を用いて検討していく。

## III. 方 法

調査方法：質問紙法

調査日時：2006年7月11日～18日

調査対象：愛知県内の3つの小学校の4、5、6年生児童。4年生99名（男子47名、女子52名）、5年生99名（男子49名、女子50名）、6年生105名（男子57名、女子48名）合計303名（男子153名、女子150名）  
質問紙の構成：表紙には、調査依頼文とフェイス・シート（調査実施日、学校と学年、性別）。

質問項目は、質問1から質問8までであり、いじめの加害経験や傍観者であった経験の有無、いじめ内容の様態やいじめについての考え、さらに自由記述で意見を求めた。すでに質問1「衝動性」、質問2「直接的・間接的な暴力的被害と自分の暴力的経験や行動」および質問3「いじめられた経験の有無といじめの様態」については報告（酒井、2008）したので、この報告では、紙数の関係で質問4についての結果のみを報告していく。

この質問では、いじめた経験の有無と実態、そのときの気持ちについて、「1. いじめたことはない、2. いじめたことはあるが、今はない、3. 今、いじている」の3段階評定を、またこの項目で、2と3に○印をつけた児童については、「どんないじめをしたか（いじめの様態）」について、「1. 仲間はずれにした 2. 悪口を言った 3. たたいた 4. いやなことを無理にさせた 5. 持ち物をかくした 6. 持ち物をよごした 7. いやがることを言った 8. その他」

表2 いじめの加害経験の有無(%)

|    | 性 | ない         | 今はない       | 今ある      | 合計        |
|----|---|------------|------------|----------|-----------|
| 小4 | 男 | 14 (29.8)  | 29 (61.7)  | 4 (8.5)  | 47 (100)  |
|    | 女 | 27 (51.9)  | 23 (44.2)  | 2 (3.9)  | 52 (100)  |
|    | 計 | 41 (41.4)  | 52 (52.5)  | 6 (6.1)  | 99 (100)  |
| 小5 | 男 | 11 (22.4)  | 34 (69.4)  | 4 (8.2)  | 49 (100)  |
|    | 女 | 26 (52.0)  | 21 (42.0)  | 3 (6.0)  | 50 (100)  |
|    | 計 | 37 (37.4)  | 55 (55.6)  | 7 (7.0)  | 99 (100)  |
| 小6 | 男 | 16 (28.0)  | 36 (63.2)  | 5 (8.8)  | 57 (100)  |
|    | 女 | 23 (47.9)  | 23 (47.9)  | 2 (4.2)  | 48 (100)  |
|    | 計 | 39 (37.1)  | 59 (56.2)  | 7 (6.7)  | 105 (100) |
| 合計 | 男 | 41 (26.8)  | 99 (64.7)  | 13 (8.5) | 153 (100) |
|    | 女 | 76 (50.7)  | 67 (44.7)  | 7 (4.6)  | 150 (100) |
|    | 計 | 117 (38.6) | 166 (54.8) | 20 (6.6) | 303 (100) |

について、当てはまる項目すべてに○印をつけてもらった。「いじめたとき、どのような気持ちになったか」については、「1. あとでいやな気分になった 2. 先生や親に見つかってしかられるかもしれないと思った 3. かわいそうだと思った 4. いつか仕返しをされるのではと少しこわかった 5. いい気味だと思った 6. おもしろかった 7. 気持ちがスカッとした 8. なんとも思わなかった 9. その他」について、当てはまる項目すべてに○印をつけてもらった。さらに「なぜいじめたか」について、「1. なんともなくいじめた 2. 仲間はずれにされると思っていじめた 3. 友だちからやれと言われたのでいじめた 4. まじめなのでいじめた 5. 相手がだれにでもいい顔をするのでいじめた 6. 前にいじめられたことがあり、その仕返しとしていじめた 7. 相手がいばっているからいじめた 8. 相手がお金をたくさん持っていたのでいじめた 9. 転校生なのでいじめた 10. 相手がおどおどして弱かったのでいじめた 11. いじめるのがおもしろいからいじめた 12. いらいらした気分だったのでいじめた 13. その他」の選択肢で当てはまる項目すべてに○印をつけてもらった。

#### IV. 結 果

##### 1. いじめに関する加害経験の有無

表2は、いじめに関する現在・過去の加害経験を示している。「いじめたことはない」という児童は、全体で38.6%、男子26.8%、女子50.7%であった。いじめ経験は、男子(73.2%)の方が女子(49.3%)よ

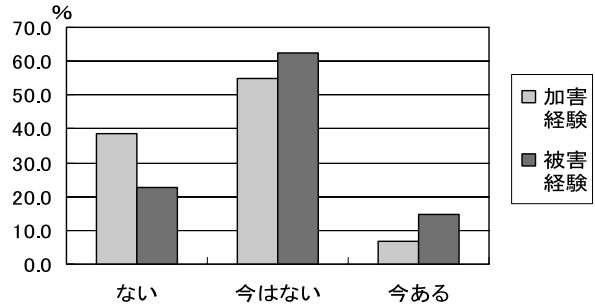


図1 加害経験と被害経験の違い

りも多いことがわかる。学年別では、4年生から6年生へとどの学年でも60%程度が加害経験をもっている。「今いじめている」という児童は、どの学年でも6~7%であり、男子(8.5%)のほうが女子(6.6%)よりも少し多い。

図1は、いじめに関する加害経験と被害経験の違いについて、全児童の結果を比較したものである。この図によれば「被害経験がない(22.8%)」という児童と「加害経験がない(38.6%)」という児童では、15.8%も差があり、加害経験がないと答えた児童が多い。また、「今いじめはないが以前にはいじめがあった」という回答を比較すると、被害経験(62.4%)が加害経験(54.8%)よりも7.6%多い。さらに「今いじめがある」という回答を比較すると、こちらも被害経験(14.8%)が加害経験(6.6%)より8.2%多い。

こうした結果からは、多くの場合、いじめの加害者は「いじめている」という認識がなく、種々のいじめ行為をしているのに対して、被害者の方は、「いじめを受けている」と思っていることがわかる。

表3は、「どんないじめをしたか」という加害方法の種類を示している。小学生におけるいじめで多い順に、「2. 悪口を言った(69.9%)」、「7. 嫌がることを言った(32.3%)」、「1. 仲間はずれにした(26.3%)」、「3. たたいた(21.0%)」、「5. 持ち物をかくした(12.4%)」となっている。

「2. 悪口を言った」といういじめは、4年生(66.7%)、5年生(74.0%)、6年生(72.4%)と多くなっている。とくに女子では、4年生(65.1%)から6年生(72.4%)へ多くなっている。

「7. いやがることを言った」といういじめは、全体では32.3%であり、男女別では男子37.5%、女子24.3%であり、男子の方が女子よりも13.2%多い。男子では、4年生が39.4%、5年生が50.0%、6年生が24.4%であり、5年生がもっとも多くなっている。女子の場

表3 いじめに関する加害方法の種類 (%)

|    | 性 | 1         | 2          | 3         | 4        | 5         | 6        | 7         | 8         |
|----|---|-----------|------------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 小4 | 男 | 4 (12.1)  | 15 (45.5)  | 8 (24.2)  | 1 ( 3.0) | 6 (18.2)  | 2 ( 6.1) | 13 (39.4) | 2 ( 6.1)  |
|    | 女 | 8 (32.0)  | 16 (64.0)  | 5 (20.0)  | 3 (12.0) | 5 (20.0)  | 1 ( 4.0) | 5 (20.0)  | 2 ( 8.0)  |
|    | 計 | 12 (20.7) | 31 (53.4)  | 13 (22.4) | 4 ( 6.9) | 11 (19.0) | 3 ( 5.2) | 18 (31.0) | 4 ( 6.9)  |
| 小5 | 男 | 10 (26.3) | 30 (78.9)  | 11 (28.9) | 1 ( 2.6) | 5 (13.2)  | 1 ( 2.6) | 19 (50.0) | 1 ( 2.6)  |
|    | 女 | 6 (25.0)  | 17 (70.8)  | 1 ( 4.2)  | 1 ( 4.2) | 1 ( 4.2)  | 1 ( 4.2) | 8 (33.3)  | 2 ( 8.3)  |
|    | 計 | 16 (25.8) | 47 (75.8)  | 12 (19.4) | 2 ( 3.2) | 6 ( 9.7)  | 2 ( 3.2) | 27 (43.5) | 3 ( 4.8)  |
| 小6 | 男 | 13 (31.7) | 36 (87.8)  | 11 (26.8) | 0 ( 0.0) | 2 ( 4.9)  | 1 ( 2.4) | 10 (24.4) | 1 ( 2.4)  |
|    | 女 | 8 (32.0)  | 16 (64.0)  | 3 (12.0)  | 1 ( 4.0) | 4 (16.0)  | 0 ( 0.0) | 5 (20.0)  | 3 (12.0)  |
|    | 計 | 21 (31.8) | 52 (78.8)  | 14 (21.2) | 1 ( 1.5) | 6 ( 9.1)  | 1 ( 1.5) | 15 (22.7) | 4 ( 6.1)  |
| 合計 | 男 | 27 (24.1) | 81 (72.3)  | 30 (26.8) | 2 ( 1.9) | 13 (11.6) | 4 ( 3.6) | 42 (37.5) | 4 ( 3.6)  |
|    | 女 | 22 (29.7) | 49 (66.2)  | 9 (12.2)  | 5 ( 6.8) | 10 (13.6) | 2 ( 2.7) | 18 (24.3) | 7 ( 9.5)  |
|    | 計 | 49 (26.3) | 130 (69.9) | 39 (21.0) | 7 ( 3.8) | 23 (12.4) | 6 ( 3.2) | 60 (32.3) | 11 ( 5.9) |

合も5年生が33.3%でもっとも多くなっている。

「1. 仲間はずれにした (26.3%)」といういじめは、全体では4年生 (20.7%), 5年生 (25.8%), 6年生 (31.8%)と学年が進むとともに増加している。このいじめの場合、男子では4年生では20.7%であるが、5年生26.3%, 6年生31.7%としだいに多くなっている。女子の場合はどの学年でも25%から30%ほどみられる。

「3. たたいた (21.0%)」といういじめは、どの学年でも同程度にみられたが、男子では26.8%に対して、女子は12.2%と半分以下である。

「5. 持ち物をかくした (12.4%)」といういじめは、男女とも同程度に、また4年生に多くみられた。

表4は、「いじめた経験がありますか」という質問に対して、「いじめたことはあるが、いまはない」と「今、いじている」と回答した児童 (186名) に「いじめたとき、どのような気持ちになりましたか」と質問した結果である。すなわち、いじめの加害者の気持ちを示したものである。

全体の児童の58.1%, 男子の55.4%, 女子の62.2%が「1. あとでいやな気分になった」と回答しており、もっとも多い。学年で見ると男子では6年生が63.4%, 女子では5年生が70.8%でもっとも多い。

次に多いのが「3. かわいそうだった (37.6%)」であった。いじめたことのある男子の32.1%, 女子の45.9%がいじめていながらもかわいそうだと感じていたことになる。学年別では、4年生53.4%, 5年生29.0%, 6年生31.8%であり、4年生と5, 6年生で差が大きい。また男女別では男子が32.1%に対して女子が45.9%であり、女子の方が男子よりもいじめの加

害者であっても、「かわいそうだと感じる児童が多いことがわかる。

「2. 先生や親に見つかって叱られるかもしれないと思った (25.3%)」という回答は、男子 (27.7%)の方が女子 (21.6%)よりも多かった。こうした回答は、男子では4年生が24.2%, 5年生28.9%, 6年生29.3%であるのに対して、女子では4年生32.0%, 5年生16.7%, 6年生16.0%となった。

いじめた後に「7. 気持ちがスカッとした (16.7%)」という回答は、男子 (20.5%)の方が女子 (10.8%)よりも多く、学年別でも男子の方が高い比率であった。男女全体で学年別で見ると、4年生が8.6%, 5年生が22.6%, 6年生が18.2%であり、5, 6年生に多くなっている。

いじめた後に「5. いい気味だと思った (15.6%)」という結果は、男女ともほぼ同率であったが、学年別では、4年生が6.9%, 5年生が16.1%, 6年生22.7%と高学年になるにつれて増加しており、こうした傾向は男女ともにみられた。

いじめていても、「4. いつか仕返しをされるのではと少しこわくなった (11.3%)」と感じていたという結果は、男子 (9.8%)にも女子 (13.5%)にもみられたが、学年別にみると、男子では4年生 (18.2%)が5年生 (5.3%)や6年生 (7.3%)に比べて高い比率であるのに対して、女子では6年生 (20.0%)が4年生 (14.0%)や5年生 (4.2%)に比べて高率であった。

いじていることが「6. おもしろかった (4.3%)」と感じた児童は、それほど多くはなく、男子はいじめている112人中7人 (6.3%), 女子は、74人中1人 (1.4

小学校におけるいじめ(2)

表4 いじめの加害者の気持ち(%)

|    | 性 | 1          | 2         | 3         | 4         | 5         | 6        | 7         | 8         | 9         |
|----|---|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 小4 | 男 | 19 (57.6)  | 8 (24.2)  | 13 (39.4) | 6 (18.2)  | 3 ( 9.1)  | 1 ( 3.0) | 4 (12.1)  | 8 (24.2)  | 3 ( 9.1)  |
|    | 女 | 16 (64.0)  | 8 (32.0)  | 18 (72.0) | 4 (14.0)  | 1 ( 4.0)  | 0 ( 0.0) | 1 ( 4.0)  | 1 ( 4.0)  | 1 ( 4.0)  |
|    | 計 | 35 (60.3)  | 16 (27.6) | 31 (53.4) | 10 (17.2) | 4 ( 6.9)  | 1 ( 1.7) | 5 ( 8.6)  | 9 (15.5)  | 4 ( 6.9)  |
| 小5 | 男 | 17 (44.7)  | 11 (28.9) | 10 (26.3) | 2 ( 5.3)  | 6 (15.8)  | 4 (10.5) | 11 (28.9) | 2 ( 5.3)  | 2 ( 5.3)  |
|    | 女 | 17 (70.8)  | 4 (16.7)  | 8 (33.3)  | 1 ( 4.2)  | 4 (16.7)  | 0 ( 0.0) | 3 (12.5)  | 3 (12.5)  | 1 ( 4.2)  |
|    | 計 | 34 (54.8)  | 15 (24.2) | 18 (29.0) | 3 ( 4.8)  | 10 (16.1) | 4 ( 6.5) | 14 (22.6) | 5 ( 8.1)  | 3 ( 4.8)  |
| 小6 | 男 | 26 (63.4)  | 12 (29.3) | 13 (31.7) | 3 ( 7.3)  | 9 (22.0)  | 2 ( 4.9) | 8 (19.5)  | 2 ( 4.9)  | 5 (12.2)  |
|    | 女 | 13 (52.0)  | 4 (16.0)  | 8 (32.0)  | 5 (20.0)  | 6 (24.0)  | 1 ( 4.0) | 4 (16.0)  | 1 ( 4.0)  | 1 ( 4.0)  |
|    | 計 | 39 (59.1)  | 16 (24.2) | 21 (31.8) | 8 (12.1)  | 15 (22.7) | 3 ( 4.5) | 12 (18.2) | 3 ( 4.5)  | 6 ( 9.1)  |
| 合計 | 男 | 62 (55.4)  | 31 (27.7) | 36 (32.1) | 11 ( 9.8) | 18 (16.1) | 7 ( 6.3) | 23 (20.5) | 12 (10.7) | 10 ( 8.9) |
|    | 女 | 46 (62.2)  | 16 (21.6) | 34 (45.9) | 10 (13.5) | 11 (14.9) | 1 ( 1.4) | 8 (10.8)  | 5 ( 6.8)  | 3 ( 4.1)  |
|    | 計 | 108 (58.1) | 47 (25.3) | 70 (37.6) | 21 (11.3) | 29 (15.6) | 8 ( 4.3) | 31 (16.7) | 17 (9.1)  | 13 ( 7.0) |

%)であった。

いじめた後も「8. 何とも思わなかった(9.1%)」という、いわゆるいじめていたという意識の無い回答は、男子(10.7%)にも女子(6.8%)にもみられた。学年別では、4年生(15.5%)に多く、5年生(8.1%)、6年生(4.5%)と高学年になるにつれて減少傾向を示した。こうした傾向は男子に強くみられた。

いじめた後の加害者の心に起こる気持ちは、いじめにより「7. 気持ちがスカッとした(16.7%)」とか、「5. いい気味だと思った(15.6%)」とか、「6. おもしろかった(4.3%)」というストレスを発散させたり、フラストレーションを解消させたりする反面、「1. あとでいやな気分になった(58.1%)」、さらに「3. かわいそうだと思った(37.6%)」という加害児童の良心やいじめた相手に対する後悔や罪の感情、さらには「2. 先生や親に見つかって叱られるかもしれないと思った(25.3%)」という罰を恐れる気持ちなどが交錯している。また、いじめを肯定する気持ちはどの項目も2割に満たないことがわかる。このことから、いじめてよかったと考える児童は少ないということがわかる。

表5は、「過去にいじめたことがあるか、あるいは今いじている」児童に「なぜいじめをしましたか」と質問した結果であり、加害者がいじめ行為をした理由を示したものである。

いじめ行為の理由づけとしてもっとも多い回答は、全体の児童(186名)の34.4%が「6. 前にいじめられたことがあり、その仕返しとしていじめた」としており、男女別では男子(38.4%)の方が女子(28.4%)

よりも多くなっている。どの学年も33%強の児童が前にいじめられた仕返しとしていじめ行為をしたと理由づけている。

次に多いのが「7. 相手がいぼっているからいじめた(32.3%)」というもので、男女ともに同程度となっている。学年別では、男女ともに小学4年生と6年生に比べて、小学5年生でこの理由でのいじめは、低い比率となっている。

理由づけがはっきりしないままに「1. なんとなくいじめた(25.3%)」という結果は、男女とも25%程度みられた。

「12. いらいらした気分だったのでいじめた(19.9%)」というのは、男子(24.1%)の方が女子(13.5%)よりも多い。また、学年別では4年生(22.4%)、5年生(24.2%)に比べて、6年生(13.6%)では低くなっている。

「3. 友だちからやれと言われたのでいじめた(10.8%)」というのは、男子(8.0%)よりも女子(14.9%)の方がやや多くみられる。また、こうした理由づけは、4年生や5年生に多く、6年生では少なくなっている。

「2. 仲間はずれにされると思っていた(8.1%)」という理由づけは、4年生(6.9%)や5年生(3.2%)よりも、6年生(13.6%)にやや多くみられた。

「10. 相手がおどおどして弱かったのでいじめた(7.5%)」というのは、男女とも5年生に、また女子よりも男子にやや多くみられるが、6年生では低くなっている。

「5. 相手がだれにでもいい顔をするのでいじめた(6.5%)」というのは、男女ともに同程度にみられた。

表5 加害者のいじめ行為の理由づけ (%)

|    | 性 | 1         | 2         | 3         | 4         | 5         | 6         |           |
|----|---|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 小4 | 男 | 6 (18.2)  | 2 ( 6.1)  | 2 ( 6.1)  | 1 ( 3.0)  | 3 ( 9.1)  | 14 (42.4) |           |
|    | 女 | 6 (24.0)  | 2 ( 8.0)  | 5 (20.0)  | 0 ( 0.0)  | 2 ( 8.0)  | 6 (24.0)  |           |
|    | 計 | 12 (20.7) | 4 ( 6.9)  | 7 (12.1)  | 1 ( 1.7)  | 5 ( 8.6)  | 20 (34.5) |           |
| 小5 | 男 | 13 (34.2) | 2 ( 5.3)  | 4 (10.5)  | 0 ( 0.0)  | 1 ( 2.6)  | 14 (36.8) |           |
|    | 女 | 4 (16.7)  | 0 ( 0.0)  | 4 (16.7)  | 1 ( 4.2)  | 0 ( 0.0)  | 8 (33.3)  |           |
|    | 計 | 17 (27.4) | 2 ( 3.2)  | 8 (12.9)  | 1 ( 1.6)  | 1 ( 1.6)  | 22 (35.5) |           |
| 小6 | 男 | 9 (22.0)  | 6 (14.6)  | 3 ( 7.3)  | 0 ( 0.0)  | 4 ( 9.8)  | 17 (41.5) |           |
|    | 女 | 9 (36.0)  | 3 (12.0)  | 2 ( 8.0)  | 1 ( 4.0)  | 2 ( 8.0)  | 7 (28.0)  |           |
|    | 計 | 18 (27.3) | 9 (13.6)  | 5 ( 7.6)  | 1 ( 1.5)  | 6 ( 9.1)  | 22 (33.3) |           |
| 合計 | 男 | 28 (25.0) | 10 ( 8.9) | 9 ( 8.0)  | 1 ( 0.9)  | 8 ( 7.1)  | 43 (38.4) |           |
|    | 女 | 19 (25.7) | 5 ( 6.8)  | 11 (14.9) | 2 ( 2.7)  | 4 ( 5.4)  | 21 (28.4) |           |
|    | 計 | 47 (25.3) | 15 ( 8.1) | 20 (10.8) | 3 ( 1.6)  | 12 ( 6.5) | 64 (34.4) |           |
|    | 性 | 7         | 8         | 9         | 10        | 11        | 12        | 13        |
| 小4 | 男 | 12 (36.4) | 1 ( 3.0)  | 0 ( 0.0)  | 3 ( 9.1)  | 1 ( 3.0)  | 9 (27.3)  | 2 ( 6.1)  |
|    | 女 | 10 (40.0) | 0 ( 0.0)  | 1 ( 4.0)  | 0 ( 0.0)  | 0 ( 0.0)  | 4 (14.0)  | 5 (20.0)  |
|    | 計 | 22 (37.9) | 1 ( 1.7)  | 1 ( 1.7)  | 3 ( 5.2)  | 1 ( 1.7)  | 13 (22.4) | 7 (12.1)  |
| 小5 | 男 | 8 (21.1)  | 1 ( 2.6)  | 2 ( 5.3)  | 7 (18.4)  | 3 ( 7.9)  | 12 (31.6) | 6 (15.8)  |
|    | 女 | 6 (25.0)  | 0 ( 0.0)  | 3 (12.5)  | 2 ( 8.3)  | 0 ( 0.0)  | 3 (12.5)  | 1 ( 4.2)  |
|    | 計 | 14 (22.6) | 1 ( 1.6)  | 5 ( 8.1)  | 9 (14.5)  | 3 ( 4.8)  | 15 (24.2) | 7 (11.3)  |
| 小6 | 男 | 16 (39.0) | 0 ( 0.0)  | 3 ( 7.3)  | 1 ( 2.4)  | 2 ( 4.9)  | 6 (14.6)  | 7 (17.1)  |
|    | 女 | 8 (32.0)  | 1 ( 4.0)  | 1 ( 4.0)  | 1 ( 4.0)  | 2 ( 8.0)  | 3 (12.0)  | 8 (32.0)  |
|    | 計 | 24 (36.4) | 1 ( 1.5)  | 4 ( 6.1)  | 2 ( 3.0)  | 4 ( 6.1)  | 9 (13.6)  | 15 (22.7) |
| 合計 | 男 | 36 (32.1) | 1 ( 0.9)  | 5 ( 4.5)  | 11 ( 9.8) | 6 ( 5.4)  | 27 (24.1) | 15 (13.4) |
|    | 女 | 24 (32.4) | 2 ( 2.7)  | 5 ( 6.8)  | 3 ( 4.1)  | 2 ( 2.7)  | 10 (13.5) | 14 (18.9) |
|    | 計 | 60 (32.3) | 3 ( 1.6)  | 10 ( 5.4) | 14 ( 7.5) | 8 ( 4.3)  | 37 (19.9) | 29 (15.6) |

また、4年生や6年生に比べて5年生は低い結果であった。

「9. 転校生なのでいじめた (5.4%)」というのは、男女ともに同程度みられたが、5年生女子では12.5%と高い率を示した。転校生はそれほど多いとは考えられない点を考慮すると、転校生に対するいじめの発生率は高いと考えられる。

「11. いじめるのがおもしろいからいじめた」という結果は、いじている児童の中で8名 (4.3%)であった。男子の6名は、4年生が1名 (3.0%)、5年生3名 (7.9%)、6年生2名 (4.9%)であり、女子の2名は6年生 (8.0%)であった。

「4. まじめなのでいじめた」と「8. 相手がお金をたくさん持っていたのでいじめた」という結果は、それぞれ3名 (1.6%)であった。

いじめ行為をしている全児童の理由づけとしてもつ

とも多い回答は、「6. 前にいじめられたことがあり、その仕返しとしていじめた」というもので、どの学年でも前にいじめられた仕返しとしていじめ行為をしたと理由づけている。次に多いのが「7. 相手がいざづっているからいじめた」というものであった。これらに共通しているのは、いじめ行為をしている原因は自分ではなく、いじめを受けている被害者側にあると考えられる点である。つまり、いじめ行為をしている約3割強の加害者は、いじめの原因はいじめられている側にあると回答しているのである。

また、いじめ行為の理由づけがはっきりしないままに「1. なんとなくいじめた」という児童が25%程度みられた。理由を聞かれても思い当たらないが、なんとなくいじめたという事実は、小学校の高学年児童でも、善悪の判断や道徳性の判断基準が確立していないためであるからかもしれない。一般的には、自分の

行動を正当化させようとするなんらかの理由があると考えられるが、そうした基準が明確には内在化していないのかもしれない。そう考えると、小学生の場合、条件さえ整えば、誰でもがいじめられる可能性をもっていることをあらわしているといえるだろう。

## V. 考 察

いじめは、どの社会でも昔から起きていたが、近年、学校におけるいじめやいじめ自殺が社会的な問題となっている。最近では、小学生にも携帯電話が必需品のように普及し、いじめの新しい定義にも示されているように、パソコンや携帯電話による中傷や悪口なども深刻な問題となっている。小学校では、まだ幼児期を脱していないような1年生から、すでに思春期を迎え心身ともに成長した6年生までの児童と一緒に勉学している。少子化にともない、幼少期からコミュニケーションを通して自分の欲求を満足させるという機会が少ない現代の子どもたちは、自己のストレスを上手に解消したり、社会のミニチュアとしての学校生活の中で自己の欲求を調整しながら満足させていくという経験が少ないままに成長している。そうした多数の子どもたちが学校生活の中でなんらかの問題が生じ、その問題が適切に解決されないような場合、それがストレスとなり弱いものへの攻撃という形でいじめが発生してくる。乳幼児期の家庭教育や小学校教育の中で、こうしたストレスを適切な手段で発散させコントロールしていくことができれば、いじめは未然に防止されていくであろう。

表2によれば、これまでにいじめた経験のある児童は61.4%であり、性別でみると男児は73.2%、女児は49.3%であった。現在いじめ行為をしている児童は6.6%であり、男児の方が8.5%で女児の4.6%より多くなっている。藤本(1996)の「いじめの実態調査」によれば、いじめを認知した経験のある者は、児童・生徒の64.8%、保護者の55.8%、教師の77.0%が身の回りでいじめを見聞きし、または直接に経験しており、本調査の結果と類似している。

いじめの加害経験と被害経験の違いについては、図1に示したように、「加害経験がない」と「被害経験がない」の差が15.8%となっている。また、過去にいじめの加害経験と被害経験の差(7.6%)も、また今のいじめの加害経験と被害経験の差(8.2%)もともに被害経験の方が高い。こうしたことから、いじめの加害者は「いじている」という認識がなく、逆に

いじめ被害者の方では、「いじめを受けている」という認識があることがわかる。大迫(1996)がいじめの経過を第1段階(遊び・ふざけ)、第2段階(いじわる、喧嘩、からかい)、第3段階(いじめ=心理的ふざけ→心理的いじめ→物理的ふざけ→物理的いじめ)という進行図で示しているが、いじめ加害者は、第1段階や第2段階をいじめとは認識していないのに対して、いじめ被害者はこうした段階での「ふざけ」や「からかい」などを繰り返し嫌なことをしてくるという意味で、いじめと捉えているのかもしれない。

いじめ加害方法の種類については、他の調査結果(藤本,1996)と同様に、「悪口をいった(69.9%)」や「いやなことをいわれた(32.3%)」がもっとも多く、次に「仲間はずれ(26.3%)」など、いずれも精神的な苦痛をとまなういじめが多くみられた。また、「たたく(21.0%)」や「持ち物をかくした(12.4%)」など直接的な行動へととなっている。

いじめ行為をした加害者の気持ちとして、もっとも多い反応が「あとでいやな気分になった(58.1%)」であり、次に多いのが「かわいそうだった(37.6%)」であった。また、女子の方が男子よりもいじめの加害者であっても、かわいそうだと感じる児童が多い。これは、加害児童の心の中に良心やいじめた相手に対する後悔や罪の感情が起こっていることを示しているのかもしれない。

いじめた後に「気持ちがスカッとした(16.7%)」とか「いい気味だと思った(15.6%)」という感情は、男子に多く、また高学年に高い比率でみられたし、「おもしろかった(4.3%)」などというストレスを発散させたり、フラストレーションを解消させたりする反応としてもいじめがなされている。しかしながら、いじめを肯定する気持ちはどの項目も2割に満たないことがわかる。このことから、いじめてよかったと考える児童は少ないということがわかる。

いじめ加害者が「いつか仕返しをされるのではないかとこわかった(11.3%)」と感じていたという結果は、いじめ被害経験者の気持ちを調査した結果(酒井,2008)において、被害経験のある児童が多肢選択形式で選んだ項目のなかで、もっとも多かったのは、「いつか仕返しをしたいと思った(54.7%)」という事実である。これは、いじめ被害者がいつかは加害者に対して反撃をしたいという感情を示している。

「先生や親に見つかって叱られるのかもしれないと思った(25.3%)」という回答は、男女ともに20%を越えていることは、いじめ行為を悪いことと思っている

証拠であり、先生や親に見つかりと罰を受けるという気持ちを持っていることを示している。

いじめ行為の理由づけとしてもっとも多い回答は、「前にいじめられたことがあり、その仕返しとしていじめた(34.4%)」であり、どの学年も33%強の児童が前にいじめられた仕返しとしていじめ行為をしたと理由づけており、男子(38.4%)の方が女子(28.4%)よりも多い。次に多いのが「相手がいばっているからいじめた(32.3%)」というものがあった。これらに共通しているのは、いじめ行為をしている原因は自分ではなく、いじめを受けている被害者側にあると考えていることである。つまり、いじめ行為をしている約3割強の加害者は、いじめの原因はいじめられている側にあると回答しているのである。

いじめ行為の理由づけがはっきりしないままに「1. なんとなくいじめた」という児童が25%程度みられた。理由を聞かれても思い当たらないが、なんとなくいじめたという事実は、小学校の高学年児童でも、善悪の判断や道徳性の判断基準が確立していないためであるからかもしれない。

「いらいらした気分だったのでいじめた(19.9%)」や「友だちからやれと言われたのでいじめた(10.8%)」、「仲間はずれにされると思っていじめた(8.1%)」、「相手がおどおどして弱かったのでいじめた(7.5%)」、「相手がだれにでもいい顔をするのでいじめた(6.5%)」などのいじめについても、また、「いじめるのがおもしろいからいじめた(4.3%)」や「まじめなのでいじめた(1.6%)」、「相手がお金をたくさん持っていたのでいじめた(1.6%)」という結果についても同様のことが言えるであろう。

一般的には、行動の背景にはそれを正当化させようとするなんらかの理由があると考えられるが、小学生の場合、そうした基準が明確には内在化していないのかもしれない。そう考えると、小学生の場合、条件さえ整えば、誰でもがいじめをしたり、いじめられたりする可能性をもっているといえる。したがって、「いじめはしてはいけないことである」という親や教師からの働きかけがいじめ防止には有効に作用すると考えられる。とくに転校生の場合、転校してくる児童がそれほど多いとは考えられない点を考慮すると、転校生に対するいじめの発生率(5.4%)は高いと考えられる。

学級担任は、転校生に対しては特別な配慮といじめが起きやすいことを考慮した在校生への指導とが必要であろう。

2005年度の都道府県別いじめの発生件数によれば、

小学校におけるいじめ件数が全国で5,087件あり、愛知県は857件でもっとも多かったし、中学校や高等学校におけるいじめ件数でも同様の結果であった。1,000人あたりのいじめ発生件数は、3.4であり、全国平均1.6の2倍以上である。こうした事実をふまえて、学校にはいじめがあることを前提として対処していくことが要請されている。

いじめ行為の理由づけとしてもっとも多い回答は、「前にいじめられたことがあり、その仕返しとしていじめた」というものであり、また、いじている加害者は「いつか仕返しをされるのではないかとこわかった」と感じている。このことは、かなり多くのいじめ加害者が、以前はいじめの被害者であったことを示している。また、いじめ加害者の気持ちとして、もっとも多い反応が「あとでいやな気分になった」、「かわいそうだと思った」であった。こうしたことは、加害児童の心の中に良心やいじめた相手に対する後悔や罪の感情が起こっていることを示している。いじめ加害者のいじめたときの気持ちや理由づけをみると、いじめっ子たちもいじめながらも悩み苦しんでいることがわかる。親や教師がいじめっ子たちの心の葛藤や悩み、フラストレーションなどを十分に聞いてやり、その心に寄り添いその辛さをわかってやることによって、発達の途上にある子どもたちは、最終的にはいじめという呪縛から立ち直り、いじめていたという加害経験を糧にして、大きく成長していくことが期待できるであろう。

## 参考文献

- 朝日新聞 2008 小中高生の暴力最多 ネットいじめ2割  
07年度 2008年11月21日付朝日新聞
- 中日新聞社・社会部編 1994 清輝君がのこしてくれたもの 海越出版社
- 藤本哲也 1996 VI「いじめの実態調査」 阪本昇一編  
1996 教育にとって「いじめ」とは何か 明治図書  
116-127.
- 文部省初等中等教育局 1991 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 大蔵省印刷局 494-495.
- 文科省初等中等教育局中学校課 1993 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 大蔵省印刷局
- 二階堂勇 2008 いじめ認知愛知最多 岐阜3位「調査徹底の結果」 2008年11月21日付朝日新聞
- 大迫静輝 1996 第6章「いじめ・不登校に取り組む」  
下村哲夫編 シリーズ・現代の教育課題に挑む 5.  
いじめ・不登校 ぎょうせい 169-184.
- 酒井亮爾 1996 学校におけるいじめ—1995年の場合—



小学校におけるいじめ(2)

愛知学院大学人間文化研究所紀要「人間文化」 11,  
11-42.  
酒井亮爾 2000 いじめ自殺(平成10年間の場合) 愛知  
学院大学文学部紀要 135-155.  
酒井亮爾 2007 「いじめ」と文科省の対策 愛知学院大

学論叢 心身科学部紀要 2(増刊号) 51-60.  
坂本昇一編 1996 教育にとって「いじめ」とは何か 明  
治図書 117-119.

最終版平成21年1月9日受理

## Bullying in the Elementary Schools (2)

Ryoji SAKAI

### Abstract

“Bullying” is a phenomenon that has been seen for a long time in any society and by any generation, but the suicide of elementary and junior high school students who were worried about bullying happened successively in 2006 and bullying has been taken up as a sensational social issue again (Sakai, 2007).

A survey by questionnaire about bullying was conducted here in three elementary schools. The questionnaire consisted of 8 items in this report, and asked about the items in a rating scale for bullying experiences. The investigation object was a group of 303 people (153 boys, 150 girls) from 4th graders to 6th graders in Aichi.

The results showed that bullying was experienced by 61.4%, with boys (73.2%) experiencing it more than girls (49.3%). In each school year, the offending experience was about 60% in every grade. The difference was seen by consideration of “Bullying had been received” and the bullying victim of the bullying assailant’s “Bully”.

As for the modality of the bullying harm, it was such that “Abuse and unpleasantness were said” was followed by mental pain such as “ostracism” often, and, in addition, an immediate action such as “Beating” and “The hiding of property”. It was shown that a lot of reactions such as “Felt unpleasant”, or “Felt sorry” as examples of the bullying assailant’s feelings, and feelings of conscience, regret for the other party, and feelings that a crime had happened to harm the child.

As for feelings such as “Feelings cleared up” and “satisfaction” and “It was thought it was satisfied”, after bullying, it was seen in a high ratio, and bullying was being performed by many in the upper-grade as a cancellation of the frustration of stress. “It was interesting” was expressed by a boy. However, feelings that affirm bullying are low, and it has been understood that children who think that bullying is good are few.

There were a lot of answers such as “I have experienced bullying, and the bullying was the retaliation”. about the bullying act when justifying the action. Moreover, the bullying assailant feared it, saying that “There was likely to be retaliation at some time”. Quite a lot of bullying assailants have shown that they were victims of bullying before. It is understood that the bullying assailant worries though bullies and suffers, too. It is important that parents and teachers sufficiently stem to the conflict in the bullying assailants, mind their worries and frustrations, drawing close to assailant’s thinking, and understanding the pain. Such an effort will lead to bullying prevention.

Keywords: bully assailant, reason for bullying, school child, elementary school